

関学英文科

—自由と絆—

西 垣 佐 理

(1995 年度 B, 1997 年度 M, 2008 年度 D)

関学英文科の思い出は数限りなくある。学部から大学院、博士号取得、院生時代の教学補佐の経験や研究員時代の文学部非常勤講師の経験に至るまで在籍が長期間にわたっていたこともあって、何を語るべきか戸惑ってしまう。ただ、改めて振り返ってみると、自己の形成基盤が関学英文科で作られたのは間違いない。そして、その根本にあるのが関学英文科の特徴である「自由」と、教授陣・先輩・同窓・後輩たちとの「絆」であると思う。

私が関西学院大学文学部英文学科を志望したのは、ひとえに学生時代の趣味だった宝塚歌劇に由来している。母校が選抜で甲子園に出場した高校1年も終わりのある春の日、月組で上演していたチャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』を観劇する機会に恵まれた。作品に感動した私は、その後早速新潮文庫の翻訳を高校の図書館で借りて一読したが、ラストシーンの不可解さ（後になって作者自身がエンディングを変更したためと納得したのだが）が気になった。これは原著を確認する必要があると思い、ならば文学部の英文学科に行き、卒論で『大いなる遺産』の恋愛論を書こうとその段階で決めた。そして、宝塚歌劇を見続けたいがため、自宅から宝塚を経由して通学できる関学英文科を志望することになったのは極めて自然な成り行きだった。今にして思えば、あの体験がなければ、現在英文学研究者になり、ディケンジアン末席に名を連ね、大学で教鞭を執っていることもなかったのだろうと思うと非常に感慨深いものがある。

だが、『大いなる遺産』を原著で読みたいという趣味から始まった夢も、英文科に合格しないと話にならない。私が受験した頃の関学文学部は、第一

志望から第十三志望まで志望学科順を受験票に記入できた。だが入試の成績次第では、たとえ文学部そのものに合格できても、第一志望の英文科に入れなかった。私は歴史にも興味があったため、もし英文科がだめでも西洋史学科でイギリス史か当時の関心事だったイタリア・ルネサンスを勉強したいと考えていた。運良く英文科に合格できたときは、これでディケンズを原著で読めるチャンスが来たのだと何か運命的なものを感じた。

入学後は学友たちの英語力の高さに驚き、何とか追いつこうと、その年から始まったインターミディエイト・イングリッシュコースの第一期生になり、ネイティブ教員や帰国子女のクラスメイトたちから大いに刺激を受けた。また、英検や TOEIC といった英語資格を取り、アルバイトで貯めたお金でイギリスに3週間語学留学するなど、自分なりに努力を重ねてみた。授業はきっちり作品を精読するものが多く、文脈にあわせた訳語を選ぶことが中々できずに苦労したが、それでも様々な作品でテキストをしっかりと読みこなす訓練をしていただいたことが特に印象深い。

卒論に関しては、『大いなる遺産』論を執筆するという夢が実現したこともあって、内容を整理してまとめることと、それを英語で執筆するという苦労以外は大変楽しい作業だった。図書館に夜までもって資料を集め、ゼミの友人とテーマについて話し合うことができてとても幸せだった。まだ研究の怖さ、大変さも知らず、ただ自分の書きたいテーマに沿って書く自由を頂けたのは、本当に良い経験だったように思う。当時の指導教官だった河村昭夫教授は、私たちゼミ生の好きにテーマを選ばせてくれて、論じ方も学生の自由であった。これは大学院に進んでからも変わらない点で、関学の研究に関する自由は、縛られることの苦手な私にはとてもありがたいことだった。

河村先生は定年のため、私たちのゼミが最終学年になってしまった。ゼミ生同士は当初一緒に活動する機会が少なかったが、四回生の秋に千刈キャンプで一泊合宿をした後一気に打ち解け、卒論提出後の打ち上げや最終授業時の打ち上げなどで良く飲み会をしたことを覚えている。卒業式の日には、笹山隆教授のゼミ生たちと一緒に合同謝恩会を行ったこともいい思い出であ

る。学部時代の友人は、インターミディエイト・イングリッシュや河村ゼミゆかりの人が多いのだが、人生のステージが互いに變化した後でも、数年に一度は集まって近況や悩みを語り合える良き仲間である。

大学院への進学を決めたのは四回生の7月に入ってからである。マスコミ関係を志望していたこともあり、就職活動では中々思わしい結果が出なかったが、筆記試験で英語の問題を解くことが意外と楽しかった。そのため、大学院か英語の専門学校で勉強し直してから社会に出てもいいなと感じ始めた。その意味では、学部選択の時と比べて極めて消極的な理由だった。河村先生は、9月の入試までたった2ヶ月しか受験準備ができない中、受験を認めて下さった。ただ、合格は難しいと思われていたようで、無事通ったときには奇跡だとまで言われてしまった。

大学院では優秀な教授陣や諸先輩方から様々なことを教わった。研究の方法やテキストの読み方、論文の書き方から果てはお酒の飲み方まで教わり、その後の学会活動で大変役に立っている。私が修士課程に入ったときは同期が13名もいて、後にも先にもない大所帯だったが、大変仲が良く、みんなで良く食事をともにするなどして絆を深めていった。大学院時代の指導教官であった杉山洋子教授は小説を本当に愛しておられ、ご専門であるヴァージニア・ウルフの作品以外にも、様々な作品を通して研究者として基本的なテキストの読み方を教えてくださった。特に印象深いのは、杉山先生が定年退官される年に一年かけて読んだジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』で、最後の章で30ページにわたるモリーの意識の流れを読み切ったときはほんの少しだけ読む力が上がったように思えた。

杉山先生が退官され、その後私の指導教授は小澤博教授に一年お世話になったあと最終的に福岡忠雄教授に師事することになった。小澤先生の授業ではエリザベス朝演劇の作品について毎回の授業で必ず何かコメントを言うことを求められたが、あの時の経験が、現在私が文学を学生に教えるときの基本的な手法になっている。そして、福岡教授からは批評理論の基本をみっちりのご指導いただいた。授業の時はいつも理論の内容がなかなか理解できず、

不出来な学生であった。それでも、研究のテーマや博士論文執筆に関しては、一貫して私の自由を認めていただけた。研究論文を見ていただく際も、福岡先生からのご指摘はいつも的を射ており、論文修正の際大いに参考となった。博士論文提出まで本当に忍耐強く見ていただけたことは、不肖の弟子として感謝の念しかない。

とりとめもなく書き連ねてきたが、ひとつ言えるのは、大学を離れた後でも、関学英文科出身者とは先輩後輩問わず学会や研究会、さらには職場で一緒になる機会が数多くあるということである。お世話になった先生方の多くは、関学英文科の先輩でもあったし、自分が非常勤講師として授業を持った英文科の学生の中で、後に大学院で後輩になった人もいた。その都度、研究者を数多く輩出する研究機関としての関学英文科の凄さを感じたが、それは研究の自由を確保しながらも、長年の伝統を担う優秀な教授陣、諸先輩方や後輩たちの熱心さや優秀さ、そして勤勉さゆえだろう。関学英文科の卒業生の一員であり、そこに強力な絆が存在していることは、私にとって大変な名誉であり、誇りでもある。そうした自由な伝統と強力な絆をこれからも継承していくために、微力ながら協力していけるよう今後も研鑽を重ねていきたい。